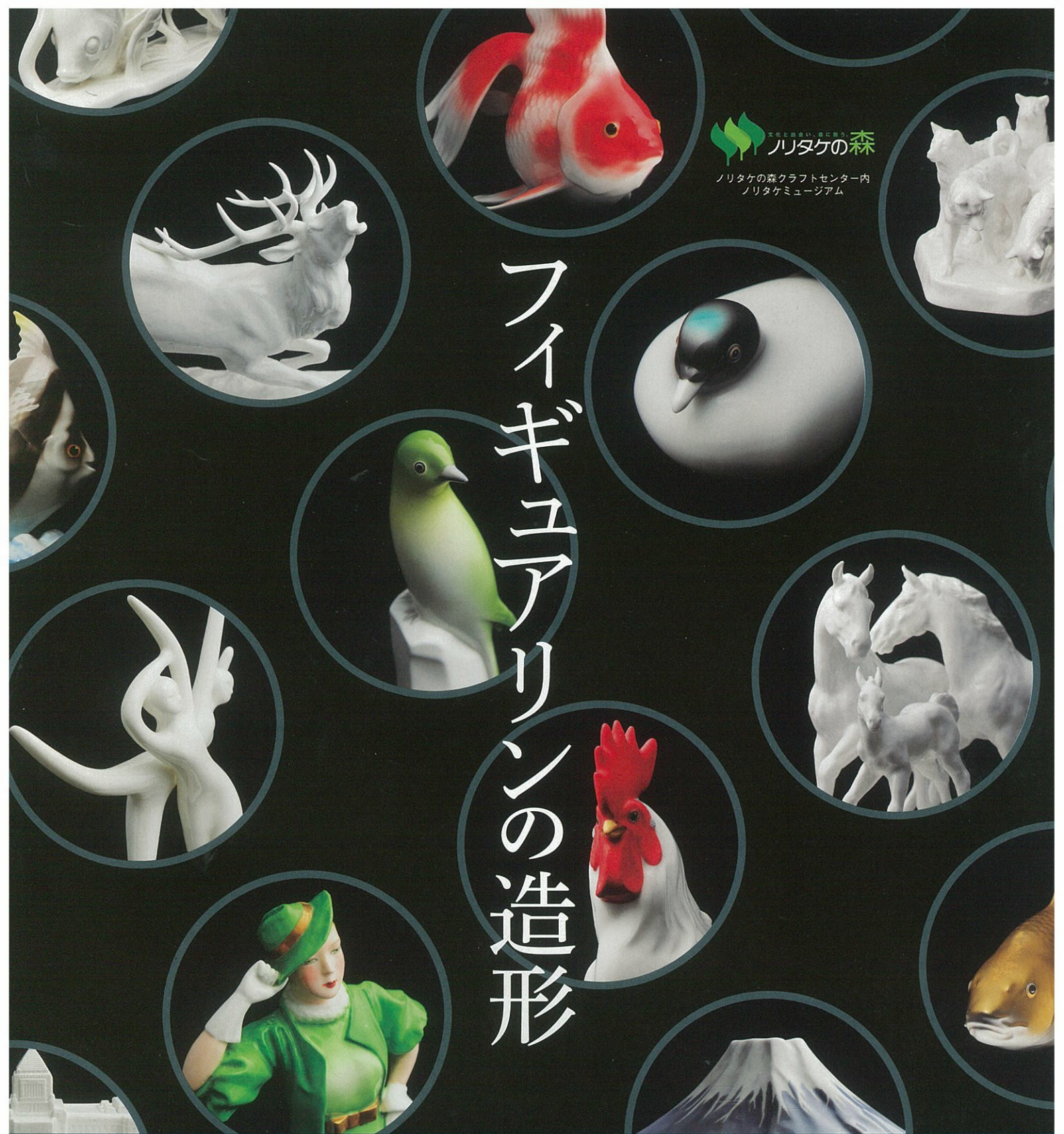


フィギュアリンの造形



ポーンチャイナ (Bone China=骨灰磁器) は、18世紀に英国で誕生した磁器の一種です。当時、英国は陶磁器製造に必要な良質な陶土に恵まれなかったため、代用として原材料に牛の骨灰を混ぜたところ、透光性がありクリーミーで柔らかな肌合いをもった独特の磁器が出来上がりました。日本では1932 (昭和7) 年に、ノリタケ (当時は日本陶器株式会社) が初めてポーンチャイナの製造に成功しました。

ノリタケがポーンチャイナを作ることになったきっかけは、1929 (昭和4) 年にアメリカで始まった大恐慌が世界に広がるなか、当時社長だった大倉和親が何か特色ある高級品を持たなければライバルに後れをとると考えたことにあります。そこで独創性を発揮できるポーンチャイナを導入するに至りました。

ポーンチャイナの製品化は高度な技術を要するため、当初はボンボン入れや花瓶、小さな置物といったものでしたが、1933 (昭和8) 年にはティーセットやディナーセットの製造も可能になりました。こうしたなか、1941 (昭和16) 年に太平洋戦争が勃発、その後深刻化し、食器の製造は中止に追い込まれました。しかしポーンチャイナだけは政府から技術保全の指定を受け製造が継続されました。そして戦後は、製造工場の一角に造形技能者 (造形師) を集めたスタジオを組織し、様々な作品を制作できる環境を整えました。

ポーンチャイナの生地焼成は一般的な白色磁器 (素焼→施釉→本焼) と異なり、先に高温で焼き締め (締焼)、釉薬を掛けて本焼成 (釉焼) を行います (締焼→施釉→釉焼)。白色磁器では本焼成時に生地の収縮が起きますが、ポーンチャイナは締焼時に収縮が完了します。こうした素材の特徴をもつポーンチャイナは、置物など複雑な形状をした製品を作るのに適しており、芸術性の高いフィギュアリン (置物) や花瓶などを作り続けてきました。

ノリタケのフィギュアリンに取り上げられたモチーフは、動物、鳥、魚などのほか、建物や器物といったものであり、多種多様な作品がつけられています。これらは造形師自身の手で粘土原型を制作することから生まれます。造形師の多くは彫刻家としての研鑽を積んでおり、彼らの創造力と表現力によって作品の芸術性が高められています。そして、その粘土原型を基に鋳込み型が作られます。さらにその鋳込み型で成型された幾つもの部品 (パーツ) が、熟練した作業員の手で正確に組み立てられます。

このようにフィギュアリンは多くの作業工程を経て誕生します。それぞれの工程で必要な優れた製造技術は、ノリタケの森クラフトセンターで今も変わることなく受け継がれています。造形師や熟練した作業員達の技と意遣いをどうぞご堪能ください。

ノリタケミュージアム

期間 2012年 9月11日(火)
 ≡
 2013年 9月 8日(日)

場所 ノリタケの森クラフトセンター3階
 ノリタケミュージアム (開館時間10時~17時)
 休館日 月曜日(祝日が祝日の場合は翌平日)、年末年始
 クラフトセンター入館料
 大人及び学生 500円(団体割引あり)
 高校生 300円(団体割引あり)
 中学生以下の方 無料
 障害者手帳をお持ちの方、
 65歳以上の方は証明書の提示により 無料